

小田隆「Figures and Animals」＋小田研究室大学院生合同展示「けものぼこ」

このたび、画家、イラストレーターの小田隆の個展「Figures and Animals」と、小田の研究室で学ぶ5人の大学院生のグループ展「けものぼこ」を同時開催する。

教員としての小田は、京都精華大学マンガ学部で美術解剖学を教える。その研究室に所属する大学院生たちの作品には、それぞれ古生物や菌類、ヴァニタス画に民俗学的モチーフといった「珍品」への関心をもとにした奇想がある。この展示空間は、あたかも近世ヨーロッパで流行した「驚異の部屋(Wunderkammer)」を現代的に再解釈したかのようである。

15世紀から18世紀ごろにかけて王侯貴族らが珍奇な品を収集し、雑多に並べた「驚異の部屋」の風習とそのコレクションが、近代に成立した博物館・美術館＝ミュージアム(Museum)の母体になっていることはよく知られている。くわえていうなら、ミュージアムの語源は古代ギリシア語で学堂を意味する「ムーセイオン(ラテン語表記: Mouseion)」である。かの有名なアレクサンドリアの大図書館はこのムーセイオンの附属機関だから、ミュージアムという言葉には文献学的な知識の収集と研究が含意されているといえる。要するに、モノの収集と陳列は文献の調査がなければ成立しないわけである。

世界に対する好奇心と文献学的探究心で成立した有名な書物に、古代ローマのプリニウスが書いた『博物誌』がある。その名の通り、天文、地理、動植物、人間、鉱物、芸術などの博物について書かれている本である。

この『博物誌』の記述は、かならずしも近代的な自然科学や人文科学の領域にはない。また、すべての記述が本人による観察に基づいているわけでもない。プリニウスはあまたの先行文献を参照してこの書物を書いた。そのため『博物誌』には怪獣や巨人、獣人のたぐいが多数登場する。まさに「けものぼこ」である。スフィンクスやドラゴン、ペガサスやユニコーンといった伝説上の動物が今日広く知られているのもこの本のおかげだ。

『博物誌』は、絵画と彫塑の起源についての物語が書かれていることでも有名である。その物語によると、ギリシアの都市コリントスの一人の少女がある若者と恋に落ちた。その若者が遠い外国に行くことになったとき、少女はランプに照らされ、壁に投影された恋人の影をなぞった。そうして描かれた輪郭線が絵画の始まりなのだという。

この影の物語が美術史的に実証可能かどうかはともかく、ヨーロッパにおけるシルエット重視の造形文化を象徴していることは事実である。たとえばルネサンス期の肖像画は、顔全体のシルエットと特徴を捉えやすいという理由から横顔で描かれることがふつうであった。

本展には、出展作家6名を戯画化した自画像が展示されている。これらの肖像は上記のヨーロッパ絵画の伝統を踏襲しているが、そのスタイルはやはり現代のイラストレーションそのものだ。これらの絵が意味するところは大きい。

絵には流行の「絵柄」がある。子供の頃に夢中になったマンガの絵を古く感じることは誰にでもあるが、これを美術の専門用語を使って表現すると「時代様式の変遷」という言い方になる。今の時代様式はSNSでバズる「神絵師」が規定しているが、これもいつまで最先端でいられるかわからない。

この意味で、時代様式はタケノコのようなものだ。食べごろに収穫すればおいしいが、すぐに旬が過ぎてかたい竹になってしまう。だが、竹の本体は地中深くに広がる地下茎である。来年のタケノコは今年とすこし味がちがうかもしれないけれども、地下茎さえ健康であれば、とにかく毎年タケノコは生えてくる。

本展の出品作家たちが共有する地下茎は、博物への好奇心である。タケノコを食べるように展示を鑑賞しながら、地面の下にどんな世界が広がっているのか想像するのも一興であろう。

美術史家、京都精華大学大学院マンガ研究科准教授
松下哲也